

令和七年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

— 次の「文章1」と「文章2」を読んで後の問いに答えなさい。

「『文章1』は、老舗^{しにせ}の桜山ホテルで※アフタヌーンティーの企画チームに配属された涼音^{すずね}に、かつての同僚^{どうりょう}で友人の呉慧怜^{ウイスイリン}から、「会いたい」というメールが届き、指定されたカフェで彼女と再会する場面である。『文章2』は、『文章1』の後、自宅に帰った涼音が祖父の滋^{しげ}に声をかけられ、慧怜との出来事を話す場面である。」

「文章1」

「お待たせ、涼音^{リヤンイン}」

突然、声をかけられ、飛び上がるほどに驚いてしまう。

「どうしたの？ お化けでも見た？」

涼音の驚愕^{きょうがく}ぶりに訝^{いぶか}しげに眉^{まゆ}を寄せているのは、スタイリッシュなスーツに身を包んだ呉慧怜^{ウイスイリン}だった。

「ごめん、ちょっと考えごととしてたから……」

「また、新しいプランのことでも考えてたの？ リヤンインは、本当にアフタヌーンティーが好きだよね」
からかうように覗^{のぞ}き込まれ、涼音は少々緊張^{きんちょう}を覚える。

外資系ホテルのプランナーに就任した慧怜は、艶やかな黒髪^{くろかみ}を高く結び上げ、一層あか抜けて綺麗^{きれい}になっていた。

「好久没見^{ハオジョウメイシエン}了(久しぶり)」

前の席に腰^{こし}を下ろし、慧怜が長い脚^{あし}を組む。

「……好久没見^{ハオジョウメイシエン}了」

涼音もかろうじて答えた。

(1) 本当に、どういふつもりなんだろう――。

屈託のない笑みを浮かべている慧怜に、改めてそう思わずにはいられない。

先日、慧怜からメールが届いた。開いてみると、①タンジョウ祝いのメッセージカードだった。転職したんだね。

そう返信すると、すぐに新しいメールがきた。

「知ってるんだ。じゃあ、もう、これも見ちゃった？」

新着メールには、帰りの電車の中で読んだ、あのネットニュースのアドレスが添付されていた。

もちろん、彼女が企画したクリスマスプディングはイギリスの正統なデザートで、涼音の②センバイ特許ではない。だから、この件で慧怜を責めるのはお門違いだということくらい、重々承知している。

でも、それならそれで、なにか事前に一言あつてもよかったのではないだろうか、と涼音は今でも思っている。こんなふうに、今になって、自分を呼び出すくらいならなおさら。

それでも涼音は、「今度の休みに会いたい」「休みは自分が涼音に合わせる」と告げてきた慧怜を、無視することはできなかった。

「もう、なにか頼んだ？」

「まだだけど」

「それじゃ、偵察ついでに本日の※スペシャルティでも注文しようよ」

涼しい顔でメニューを見ている慧怜の横顔を、涼音はそっと窺う。そこに、悪びれたものは微塵もない。どこかで裏切られたような気分になっている自分のほうが、間違っているのだろうか。

スタッフを呼んでオーダーを済ますと、慧怜は正面から涼音を見た。

「リヤンインは、私に怒ってるの？」

単刀直入に切り込まれ、涼音は返す言葉を失った。

途端に、慧怜が噴き出す。

「リヤンインは正直者。私はリヤンインのそういうところが好き」
ひとしきり笑った後、慧怜は表情を引き締めた。

「でも私は、なにも悪いことはしていない。リヤンインのボツになった企画を、もっとシーンに合った場所に持って行って、プランを実現させただけ」

慧怜の言うことはもつともだ。火を灯して食べる少々刺激的なブディングは、外資系ホテルのラウンジのほうで客層に合っていると、慧怜は元々指摘していた。

「怒ってはいないよ」

正直者と笑われたついでに、涼音は率直な気持ちをぶつけることにする。

「ただ、事前に転職のことを教えてほしかった」

「なんで」

ところが即座にそう返され、戸惑った。

「なんでって……」

「友達だから？」

曖昧に頷くと、慧怜はふつと冷めた笑みを漏らす。

「老好人……」

「え、なに」

意味が分からず聞き返した涼音にかまわず、慧怜が続けた。

「私はリヤンインが好きだよ。だから、アドバイスもしたし、中国語も教えた。でも、立場は違う」

「立場？」

「私、ずっと、桜山ホテルの正社員になりたくて、登用試験も何度も受けてた。でも、結局、サポーター社員のままだった」
(2) たんたん 淡々と告げられ、涼音は言葉を呑む。

初耳だ。

中国語はもちろん、英語も日本語も流暢に操るトライリンガルの優秀な慧怜がサポーター社員でいるのは、小さな子供を持つ彼女自身が、残業のない勤務形態を選んでいるからだと思ひ込んでいた。

「香織が産休を取るようになって、私は期待したよ。でも、⁽³⁾ シャンチーは、私を後任に推薦しなかった」
綺麗にエナメルを塗った指先が、涼音に突きつけられる。

「代わりにリヤンイン、あなたがきた」

茫然とする涼音の前に、慧怜は肩をすくめた。

「シャンチーはいい社員。ちゃんと会社のこと、考えてる。元々正社員のリヤンインを異動させるほうが、会社にとっては楽なものね。でも、きつと、それだけじゃない」

慧怜が、少し意地の悪い笑みを浮かべる。

「シャンチーは、私が怖かったんだ」

「怖かった？」

思わず聞き返せば、「そう」と深く頷かれた。

「リヤンインに会って、一緒に働いてみて、それがよく分かった。だって、リヤンインはラオハオレンだもの。絶対、シャンチーを出し抜いた
りしないでしょ」

答えられない涼音の前で、慧怜は腕を組む。

「正社員はいいよね。雇いどめはないし、産休もとれるし、もちろん育休もとれる。前のホテルでも契約社員だった私は、最初の子供を産んだとき、なかなか保育園が決まらなくて、結局契約^③ カイジヨされるしかなかったんだ。でも、正社員が手厚い保護を受けている間、その穴埋めをしているのは一体誰？ 契約や派遣の非正規スタッフなんじゃないの？ そういうことを抜きにして友達^④ ことできるほど、私は好人^⑤（いい人）じゃない」

注文したカフェオレとスペシャリテの柿のタルトが運ばれてきて、慧怜は一旦、言葉を切った。

柿のゼリーよせを載せたタルトは見た目にも美しかったが、涼音はそれを楽しむ気分にはなれなかった。

ラウンジは香織を中心に一つにまとまっていると、ずっと疑うことがなかった。誰よりも頼りになるサポーター社員の慧怜が、心にそんな思いを秘めていたなんて、想像もしていなかった。

だが、正社員である自分が、サポーター社員に頼るという事態こそが、そもそも間違っていたのではないだろうか。

慧怜が言うように、正社員とサポーター社員では、給与も、保険も、待遇も違うのだから。

「でもね、シャンチーは正しいよ。私が後任になったら、絶対、シャンチーを出し抜くもの」タルトにフォークを刺しながら、慧怜が続ける。

「だけど、それは当たり前のこと。シャンチーが休んで子育てしている間に、こちらは必死になって働くんだもの。立場が変わるのは当たり前」きっぱりと告げてから、慧怜はタルトを口に運んだ。

「あ、面白い食感。これ干し柿なんだ」

慧怜の呟きに、涼音もフォークを手取る。一口食べてみたが、残念ながらあまり味がしなかった。

「リャンインは随分頑張ってアフタヌーンティーの開発をしてるけど、来年、シャンチーが戻ってきたら、あっさりその立場を明け渡すつもり？」

タルトをもそもそと食べていると、再び慧怜が問いかけてきた。

「今回、私は思い知ってしまったの。会社から一歩外に出ると、私はただの『高齢出産者』なんだって」

香織の独り言が甦り、涼音はどう答えてよいのか分からなくなる。

産休中の香織も、決して楽なことばかりではないようだった。香織は香織で、悩み苦しんでいる。けれど、香織が戻ってきたら、また一緒に楽しく働こうと単純に考えていた自分が、急に幼稚に思えてきた。重ねてきた努力を認めて、香織は自分を後任に抜擢してくれたのだと、ずっと信じていた。

でも、それだけではなかったのかもしれない。

優秀で野心家の慧怜ではなく、自分を後任に選んだのは、香織自身の保身のためでもあったのかも分からない。

(4) 涼音の心が重く沈んだ。

「いいから、話してみろ」

言い渡る涼音に、滋が曇みかけてくる。

湯呑みを手渡しながら、涼音はぼつぼつと事のあらましを語った。あんまんが冷めるのも構わず、滋は話に耳を傾けてくれた。

「結局私は、自分の見たいものしか見てこなかったんだと思う」

誰の本音にも気づくことができず、ただ単純に、自分の努力が認められたのだと信じ込んでいた。

しかし、現実には、涼音が思っているように簡単ではなかったようだ。

「でも、その先輩はお前に優しく、その仕事仲間はお前にとって頼もしかったんだろう？」

黙って聞いていた滋が、やがて口を開く。

「それは……、そうだけど」

「だったら、それで、いいじゃないか」

お茶を一口飲み、滋があんまをかけた。

「現実なんてのは、いつだって、厳しいもんだ。それが分かったうえで、美しい面を見るのも一つの覚悟だ」

あんまを咀嚼しながら、祖父が続ける。

「俺は、昔、『浮浪児』と呼ばれた時期があつてな、その頃は、かっぱらいでも、拘りでも、追い剥ぎでも、なんだってやったもんだよ」

「おしいちゃんか？」

「ああ、そうだ」

半信半疑で聞き返すと、深く頷かれた。

涼音の祖父、滋は戦災孤児だった。東京大空襲で家を焼かれ、たった一人生き残った滋は、迎えにくるといふ親戚からの伝言を信じ、上野の駅前に何日も立ち続けていたそうだった。だが、どれだけ待っても、母方の親戚も父方の親戚も、誰も現れなかった。

「あの頃は、食料も不足して、どこの家にも余裕はなかったからな……」

当時のことを思い出したように、祖父が遠い眼差しをする。

「俺と同じ、行く当てのない子供が、地下道にはたくさんいたよ」

自分は見捨てられたのだと悟り、祖父は上野の地下道の片隅で、同じ境遇の子供たちと一緒に生きることを決めた。

「保護されるまでは、とにかく、人殺し以外、なんだってやったよ。いや、あのまま、地下道に居たら、結局はやくぎの使い走りにでもなって、人殺しだってやってたかもしれない」

「おじいちゃん……」

あまり昔の話をしようとしないう祖父から初めて聞く言葉に、涼音は驚く。

「本当の話だ」

滋が湯呑みをテーブルに置いた。

「そうでもしなきゃ、生きていけなかった。一人で警察に行くのは、まだほんの子供だった俺には恐ろしかったしな」

ある日、ホームに忍び込んで、田舎から出てきたらしい年老いた婦人の荷物を奪おうとしたとき、突然、一人の女性から「おやめなさい」と肩をつかまれた。

いつもなら体当たりして逃げるところだ。

ところが、女性の姿を見た瞬間、少年だった祖父は金縛りにあつたように動けなくなってしまうたという。

「本当に、女神だと思ったんだ」

少年時代の祖父の前に立っていたのは、着物姿の見たことがないほど美しい女性だった。

「あれは六月の蒸し暑い日だった。東京大空襲があつた三月から着の身着のままだった俺は、相当汚く、臭かつたはずだよ」

だが女性は、祖父の手を取って「一緒に警察にいきましよう」と諭した。

「※感化院へはいきたくはないでしょう。あそこへは感問にいったことがあるけれど、とても寂しいところだった、と、その人は言うんだ」

感化院とは、今という少年院のようなところだ。番号で呼ばれるそんなところよりは、警察を通じて孤児院へいくほうがましだろうと、女性は祖父を懸命に説得したそう。

あまりの熱心さに根負けし、祖父が曖昧に頷くと、女性はにっこりと微笑んだ。それから、持っていた鞆から小さな包みを取り出して、祖父の手に握らせた。

中には、小ぶりの牡丹餅が二つ入っていた。

「よく聞き分けてくれました。ご褒美ですよ」と、女性は言った。

あまりのことに祖父はほかんとしたが、「お上がりなさい」と促され、恐る恐る口にした。そのときの、脳髓まで痺れるようなあの美味さ。

「甘いものなんて、久しく口にしていなかったからな。本当に、その瞬間、もうこれで死んでも構わないと思ったよ」
無我夢中で平らげていると、女性は自分のことを語ってくれた。

「その人は、舞台女優だったんだよ。これから広島^{ひろしま}の軍需工場へ慰問公演に向かうところだと言っていた。牡丹餅は、饑別にとお母さんと妹さんが、大事にとっておいた砂糖と小豆と糯米を放出して、特別にこきえてくれたものだったらしい」

大切な饑別を惜しげもなく与えてくれた女性に伴われて祖父は警察に向かい、その結果、少年保護団体に保護されることになったのだ。
「今でも、あの牡丹餅の味が忘れられない」

やがて、日本が負けて戦争が終わったが、孤児院での日々はつらいことが多かった。

けれど、忘れられない「ご褒美」があったから、祖父はどんなに酷く大変なことにも、耐え忍ぶことができたという。
住み込みで働くことが決まり、孤児院を出たとき、祖父は自分に「ご褒美」をくれた女性にもう一度会いたいと思った。

そして④ ショウソクを調べていくうちに、「演劇疎開」という名目で広島に慰問に赴いた劇団員が、看板女優を含めて、全員、新型爆弾で死亡していたことを知った。

「その看板女優が、俺にご褒美をくれた女神さまだ」

そこまで話すと、滋はふつりと口を閉じた。

「涼音、お菓子はちゃんと味わって食べなきゃいけないぞ。寝っ転がってテレビを見ながら食べたり、だらしなく際限なく食べたりしちゃ駄目なんだ」

「お菓子はな、ご褒美なんだ。だから、だらしない気持ちで食べてたら、もったいない」
瞬きと同時に、ぽたりとテーブルにしがくが落ちる。

気づくと、涼音の瞳から涙があふれていた。

子供の頃から繰り返し聞かされてきた⑤ 祖父の言葉の真意を、初めて知った気がした。

「おじいちゃん……」

涙ながらに呟いた涼音を、滋がいつくしむように眺める。

「現実なんてのは、本当に、いつだって惨いもんだ。今も昔もな。今は戦争中の世の中とはまったく違うが、お前たちにはお前たちの大変さがあるんだろう。でも俺は、あの人が見せてくれた美しさをずっと心に留めて生きてきた。これからだって、そうだ」
自身に言い聞かせるように頷き、滋は続けた。

〔6〕人が生きていくのは苦いもんだ。だからこそ、甘いもんが必要なんだ」
眼の前に、あんまんを載せた皿を差し出される。

「ほれ、食え」

涼音はまだ仄かに温かいあんまんを手にとった。

いつも自分は、己にとつて都合の良い面しか見られない。

慧怜から本音を打ち明けられたときからずっと、そんな思いに苛まれていた。
でも、都合の良い面を見ることが、物事の美しい面を見ることが、きっと違う。

香織が自分にとって良い先輩で、慧怜が頼りになる仕事仲間だったこともまた、れっきとした真実だ。

「おじいちゃん、ありがとう」

いただきます、と手を合わせて、涼音はあんまんを一口かじった。

柔らかな皮の中から、甘い餡が滑らかに溶け出す。

〔7〕※人気パティスリーのタルトは味がしなかったが、祖父と食べるコンビ二のあんまは、しみじみと美味しかった。

（古内一絵『最高のアフタヌーンティーの作り方』より）

※アフタヌーンティー……午後に飲むお茶のこと。多くの場合、紅茶とともに軽食を楽しむ。

※スペシャリテ……シェフが得意とする一品。

※雇いどめ……契約社員などの働く期間が決められている契約において、その契約期間を終えたあと更新をしないこと。

※感化院……非行少年や非行少女の保護・教化の目的で設けられた施設。

※人気パティスリーのタルト……ここでは慧怜と再会した場面で食べたタルトを指す。なお、パティスリーとは菓子店のことである。

問一——線①～④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線①「本当に、どういふつもりなんだろう——」とありますが、このときの涼音の心情の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 別々の道を歩み始めて間もなく慧怜が会おうと言ってきたことに困惑し、その思いを抱いたまま再会を果たしたが、企画をめぐるトラブルが解決したとみなしている慧怜の悪びれもせず接してくる様子からは彼女の考えがわからず、改めて困惑している。

イ 詳しい説明もなく慧怜が会いたいと言ってきたことに動揺し、その思いを抱いたまま再会を果たしたが、転職して美しさに磨きがかかった慧怜の明るく微笑んでいる様子からは彼女の真意をはかることができず、改めて動揺している。

ウ 理由も告げられず会いたいという連絡が慧怜からきたことに当惑し、その思いを抱いたまま再会を果たしたが、以前と全く変わらない親愛の情を持つて接してくる慧怜のころころと表情を変える様子からは彼女の意図を汲み取れず、改めて当惑している。

エ 会って話したいという唐突な連絡が慧怜からきたことに戸惑い、その思いを抱いたまま再会を果たしたが、新しいアフタヌンティーの企画を探りを入れてくる慧怜のからかい半分の様子からは彼女の本心を読み取れず、改めて戸惑っている。

オ 場をあらためて会って話そうと慧怜から連絡がきたことに不安を覚え、その思いを抱いたまま再会を果たしたが、形式ばった中国語で挨拶をしてきた慧怜のどこか他人行儀な様子からは彼女の気持ちを押し量ることができず、改めて不安を覚えている。

問三——線(2)「淡々と告げられ、涼音は言葉を呑む」とありますが、このときの涼音の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 涼音の考えたプランを利用した慧怜は間違っていないと頭では理解しつつも、せめて事前に伝えてほしかったという思いをありのままに伝えたことに対して、慧怜の思いや立場をあっさりと告げられ、驚きのあまり何も言えなくなっている。

イ 涼音が考案した企画を勝手に流用したことは野心家の慧怜ならば仕方ないと思いつつも、せめて一言いつてほしかったという思いをはっきりと伝えたことに対して、慧怜の思いや立場をさばさばした調子で告げられ、考えていたことが吹き飛んでしまっている。

ウ 涼音の企画は刺激的であり採用されなかったこと自体は受け入れつつも、慧怜が他のホテルで提案するのであれば涼音の許可を得るべきだという思いを包み隠さず伝えたことに対して、慧怜の思いや立場を端的に告げられ、哑然として二の句が継がないでいる。

エ 涼音が考えたプランを無断で利用したことについて涼音に伝える必要はないと思いつつも、友達なのだから言いつてほしかったと素直に伝えたことに対して、慧怜の思いや立場を落ち着いた様子で告げられ、呆氣にとられて言いかけた言葉を発せずにいる。

オ 涼音が企画したデザートは誰もが考えつくものであることは承知しつつも、前もって連絡してほしかったという思いを正直に伝えたことに対して、慧怜の思いや立場を冷静な様子で告げられ、反論したい気持ちを我慢して続きを待っている。

問四——線(3)「シャンチーは、私を後任に推薦しなかった」とありますが、慧怜はその理由をどのように考えていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 香織は、臨機応変に仕事をこなす人物を後任に選べば復帰した後のライバルになりかねないと考え、自分を推薦しなかったと慧怜は考えている。

イ 香織は、意見を無理やり通そうとする人物を後任に選べばその人の主張によって香織自身の地位が脅かされると考え、自分を推薦しなかったと慧怜は考えている。

ウ 香織は、確固たる実力があり貪欲な人物を後任に選べば職場で築いてきた立ち位置を奪われてしまうと考え、自分を推薦しなかったと慧怜は考えている。

エ 香織は、他人を蹴落とすことに抵抗の無い人物を後任に選べば職場全体の雰囲気が悪くなってしまうと考え、自分を推薦しなかったと慧

怜は考えている。

オ 香織は、頼りがいがあつて信頼できる人物を後任に選べば今まで得ていた信頼や評価がその人に移ってしまうと考え、自分を推薦しなかったと慧怜は考えている。

問五 — 線④「涼音の心が重く沈んだ」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 慧怜の言葉によって、正社員が待遇面でとても恵まれていたという事実を思い出し、自分が立場の違いをわきまえずに接したことで契約社員の慧怜や産休を取得した香織を傷つけていたのではないかとすることに思い至り、香織の独り言に対して明確な考えを示せない自分の浅はかさが身に染み込めたから。

イ 慧怜の言葉によって、それぞれの立場に応じた悩みや苦しみがあることに気付かされ、悩みを抱えていた慧怜や香織にもっと寄り添うべきだったのではないかとすることに思い至り、周囲のことを気にせず自分が楽しく働けばよいと考えていた自分の未熟さを実感したから。

ウ 慧怜の言葉によって、自分は契約社員の不安定さや産休時の不安から意識的に目を背けてきたという事実を思い出し、自分が後任に選ばれた理由は香織の保身だったということに思い至り、また香織と共に笑顔で働いていけると安易に考えていた自分の幼稚さを痛切に感じたから。

エ 慧怜の言葉によって、非正規の立場で働く辛さや産休に伴う悩みがあることに気付かされると共に、自分が実力ではなく香織の立場を守るために後任に選ばれたのではないかとすることに思い至り、香織の復職後も一緒に楽しく働けると都合よく解釈していた自分の甘さを痛感したから。

オ 慧怜の言葉によって、正社員は会社に守られた存在であることに気付かされると共に、各自が恵まれた立場を目指して必死に働いていたのではないかとすることに思い至り、香織の笑顔の裏に潜む本心に気付かず香織の復帰後のことも単純に考えていた自分の幼さを思い知ったから。

問六——線(5)「祖父の言葉の真意」とありますが、それはどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦後の食糧難の時期に口にした牡丹餅の味が忘れられない祖父にとって、お菓子は当時のことを思い出させる貴重なもので、食糧が十分にあることへの感謝の気持ちを忘れてはいけないというもの。

イ 警察への出頭を決意したことで牡丹餅を口にすることができた祖父にとって、お菓子は誠実な行いに対する対価としてのみ与えられる神聖なもので、食べる時も気を引き締めなければならないというもの。

ウ 優しく熱意ある舞台女優と牡丹餅の美味しさに救われた経験がある祖父にとって、お菓子は力を与えてくれる特別なもので、いい加減な気持ちで向き合ってはいけないというもの。

エ 舞台女優のために作られた大切な牡丹餅を譲り受けた経験がある祖父にとって、お菓子はいろいろな人の気持ちが込められた大切なもので、真剣な気持ちで食べなければ失礼にあたるというもの。

オ 舞台女優がくれた牡丹餅によって生きていることを実感し、後にその舞台女優と死別した経験がある祖父にとって、お菓子は生死について考えさせる重要なもので、居住まいを正して食べなければならないというもの。

問七——線(6)「人が生きていくのは苦いもんだ。だからこそ、甘いもんが必要なんだ」とありますが、祖父はなぜこのような話をしたのだと考えられますか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問八——線(7)「人気パティスリーのタルトは味がしなかったが、祖父と食べるコンビニのあんまんは、しみじみと美味しかった」とありますが、このときの涼音の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 慧怜とタルトを食べた時は、慧怜の話を聞いて「自分の見たいものしか見てこなかった」と身をもって感じ、暗い気持ちで上の空になっていたが、祖父との会話を経て、今まで見てきたものの中にも真実があったことや美しい面を見ることの大切さを知って気持ちが晴れ、あんまんを味わうことができている。

イ 慧怜とタルトを食べた時は、慧怜の本当の気持ちを知って「一つの側面からしか物事を見ていなかった」と実感し、そのことを恥じていた

が、祖父との会話を経て、色々な側面から物事の本当に美しい面だけを見出すことができ気が楽になって、あんまんの味を楽しむことができる。

ウ 慧怜とタルトを食べた時は、慧怜の本当の気持ちを知って「慧怜のことを何一つ知らなかった」とふがいなく思い、気持ちが沈んでいたが、祖父との会話を経て、物事の美しい面だけを見て対処していくことにも意義があると気付かされ気持ちが落ち着いて、あんまんの甘さをかみしめている。

エ 慧怜とタルトを食べた時は、慧怜の話を聞いて「慧怜の境遇に目を向けようとしていなかった」ということに思い至り、自分の浅はかさを嘆いていたが、祖父との会話を経て、たとえ見てきたものが綺麗事であつても美しければそれは人生の糧となることを知り気が和らいで、あんまんの甘さが身にしみている。

オ 慧怜とタルトを食べた時は、慧怜の話を聞いて「慧怜や香織の本心は自分が考えていたものとは違っていた」と気付き、単純な考えの自分に落胆していたが、祖父との会話を経て、物事の都合の良い面と美しい面とを分けて考えることの必要性が身にしみて気が安らぎ、あんまんの味に感じ入っている。

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

書くことは考えることである。考えることが書くことによって結果するといふのではなく、書くことが考えることであるといふこの順序を大切にしたい。

エスノグラフィーは、現実を書き残す実践である。見聞きするだけでは消え入ってしまうものを、書くことで表し出す。そうして書き表したことを通じて、あらためて見聞きする。この循環的で総合的な営みによって、現実の別の容貌が——すなわち《まだ・ない》ものが《すでに・ある》ものとして——立ち現れてくる。書かれた文書史料を題材にするというよりは、いまだ文書にならざるものを文書化する過程で何が生まれていくのかを捉え、そこから考えることが、(1) エスノグラフィー研究の醍醐味である。

思えば、私は小学生の頃から、感情を抑えきれない出来事があった日に、ひとり夜に、ノートや裏紙に、感情に沿った言葉を書きながってきた。誰の目にも触れることのない、断片的な言葉である。そんな言葉を書くことは、感情に囚われた自分を突き放すために必要なことだった。書くことを通じて、状況と自分との関係を整えようとする。自己形成の過程において、誰に見せるわけでもない、自分だけのノートと向き合う時間を通じて考えを深めること、すなわち書くことを通じて考えることが、私にとっては必要なことだった。

マニラで過ごしていた夜、友人が紙片の裏に、ボールペンで言葉を書き付けていた。彼は人生がうまくいかず、妻と別れた直後だった。彼もまた、状況と自分との関係を整えようとしていた。書くことは自らを※ケアすることでもある。私は「書き物」に関心があるというよりは、「書くという行為」に関心があるのだと、本書を書きながら、あらためて気づいた。もちろん現場で書かれたフィールドノートをはじめ、さまざまな書物が本書の土台になっているが、同時にフィールドノートなどを書くという行為を通じて考えてきたことを、私は本書において読者のみなさんに提示したい。

なかでも※本書では、「他者を書くという行為」をめぐる思索を提示していく。本書はフィリピン・マニラで見聞きした出来事の機微を記す試みであるが、日本語で書かれたこの本を手にとって多くの読者にとって、その地は非常に遠くの世界に思われるかもしれない。たしかにそこは、地理的にも国内のフィールドと比べると随分と遠く、社会的な制度も異なっている。

しかしながら、そうした他者たちの世界で生活をしながら出来事を書き留めていくなかで、その世界のありようが、だんだんわかってくる。わ

かつてただけではない。その世界へと自らが開かれていくようになる。言い換えれば、私にとって、他者たちの世界を①タズねそして書くことは、⁽²⁾「自らがその世界へと」とりさらわれて「いく」ことである。自己を中心に他者たちの世界をまなぐすのではなく、他者たちの世界が中心になって自己が組み替えられていく。それは、ボディ・スナッチャー（身体のととり魔）が侵入する経験とも言えるだろう。そして、このとりさらわれの過程において、他者たちの世界を私は垣間見る——隣人として見る——ようになっていく。

さらに、そうした世界からこちら側を見てみると、自分の慣れ親しんだ地を逆さまに眺めることになる。それは、⁽³⁾「自らの気づかれざる桎梏を見つめる機会が提供される経験でもあるだろう。それまであたりまえであった事柄が、揺らぎをもって立ち現れてくる。自らの安定していたはずの足場が崩れると同時に、別の見方が登場してくるのである。この点は、⁽⁴⁾書くという行為だけでなく、読むという行為にも通ずる営みであるだろう。これまでに②カンコウされたエスノグラフィの作品群を読んでいたとき、それらが私にとって見知らぬ世界の記録であるにもかかわらず、まるで身近な出来事のように読めたことが何度もあった。「近き」や「遠き」という通念が瓦解していき、別の見方で身近な日常が捉えられていくようになるのである。他者を書くという行為——あるいはそうして書かれた書物を読むという行為——の意味は、こうして自らが変化するという点にあるだろう。」

このような本書の試みにおいて、特に注目するのが、マニラの貧困世界を生きる人びとが直面する困難な時間についてである。ボクシング・キャンプ、都心のスクオッター地区、人里離れた再居住地の事例が記されるが、それらを貫くものがあるとすれば、それは⁽⁵⁾「アウエーの時間」とでも呼べるものだろう。フィリピンのボクサーは、日本で試合をするとき、敵地Ⅱアウエーのリングに上がることになる。アウエーで試合をすることは、大多数の敵陣応援団の前で戦うことだけを意味するのではない。減量中の身体を携えて長時間のフライトで異国に移動し、到着した空港から宿泊先までは、通行人に道を尋ねながら見知らぬ街を自力で移動する。減量中であっても摂取可能な食材を、現地のスーパーマーケットで苦労して探す。気候も違い、試合は予定時間には開始されず何時間も待たされる。ハプニングだらけなのである。ホームのボクサーが、運転手を伴って悠々と自動車で計量会場に登場するとき、アウエーのかれらはすでに数多のハプニングを経て消耗している。

アウエーの時間とは、ホームに居る者が決して経験することもないような絶えざるハプニングを引き受けなければならない時間だ。ホームの観客はリング上での戦いに目を向けるが、アウエーを生きる者はリングに上がるずっと前から別の戦いに直面している。アウエーの時間を生きるのは、ボクサーだけではない。マニラのスクオッター地区で、住み慣れた家を破壊されて再居住地へと③ユソウされる

人びとも、アウエーの時間を強いられる。仕事、学校、人間関係、あらゆる条件が強制的に組み替えられ、今後の見通しが立たないまま、日々を凌がなければならない。マニラの都市再開発が進み、④カンセン道路や主要河川敷の整備が進む今日において生み出されている再居住者もまた、アウエーの時間へと放逐される。

けれども、本書のメッセージは、アウエーの時間を生きる人びとに同情することにはない。そうではなく、アウエーの側に置かれるからこそ、ホームに居る者が見ないで済ませている社会の根底的な成り立ちが見えてくる点が重要である。ホームに居ると考えずに済ませられることが、アウエーに在ると思考の対象になる。ハプニングに対処する中で練り上げられる強度がある。本書が目指すのは、こうした固有の位置性から社会学的思考を練り上げることである。⁽⁶⁾方法としてのアウエーだ。

アウエーという言葉は、また、別のイメージをつくりあげることも可能にする。※序章で言及したが、私の父は、中学を卒業後、貧しきゆえに高校に進学できず、その後、五〇年間にわたり自動車修理工として働いた。父は工場（ごうば）と読むか、ごうじょうと読むかで、もの見え方は変わる。前者で読んでほしい）でたくさんの排気ガスを吸って最期は肺気腫で逝ったが、父の姿が私をして貧困や構造的暴力の考察へと向かわせた。学問の「が」の字もないアウエーの環境で育った私が、自分の生きてきた世界を対象化して掴まえたおそうとした軌跡が、本書には刻み込まれているだろう。

私にとって社会学は、自らの姿を（再）発見することを可能にする領域の呼び名である。序章では、マニラのスクオッター地区で、暗がりの部屋で過ごす※ロセリトについて書いた。ロセリトの経験は個的なものである。だが、社会学は、ロセリトをそうした状況に追い込む貧困という条件を照らし出しながら、ロセリトの経験に立ち返ろうとする。条件への逆行は、個的な経験が完全に個的なものではなく、そこに類的な性質が潜んでいることを表し出す。ロセリトの経験を書くことは、貧困下を生きる無数の「ロセリトたち」の経験を浮かび上がらせる。かれはわたしだ。個的経験を、類的経験へと接続しながら書くのが、社会学のエスノグラフィーである。

そうしたエスノグラフィーを書き残すことは、ケアをめぐる議論とも交錯する実践となるだろう。困難な時間に投げ入れられたとき、いかにしてその時間を凌ぐのか。ひとつのやり方は、その困難な時間が自分のみに唯一到来したのではなく、他の人びともまた同様の時間を経験したことがある点を知ることだろう。立ち退きの通達を受け取った者は、ひとりで圧力に向き合うことは難しい。だが、役場からの通達の送付が、これまで住人たちに対して採られてきた所定の圧力の掛け方であることを知ったとき、かれは局所的に縛り付けられた自らの視座を、より広いそれへと放つことができる。困難な時間が個的にだけでなく類的にも経験されているのだと理解すれば、その対処法も類的に――すなわち集合的な智慧

を用いて——考えていくことが可能になる。そしてそれは、困難な時間をひとりで背負い込む人に、『あなたはひとりではない』と語りかけることでもある。

(石岡丈昇『タイミングの社会学 デイテールを書くエスノグラフィー』より)

※ケア……ここでは、困難な状況にあつて放つておくことができないものへの対処、気づかい、世話。

※本書……本文は前書きとして書かれたものである。

※序章……本文とは別の箇所かしこを指している。このあとに出てくる「序章」も同じ。

※ロセリト……筆者の友人で、マニラでボクサーとして稼ぎを得ながらスクオッター地区に居住している若い男性。貧しく電氣代が支払えないため、こっそり盗電してテレビだけは観られるようにし、その明かりだけで生活している。筆者は「暗がりの部屋」を貧しさの象徴として述べている。

問一——線①④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線(1)「エスノグラフィ―研究の醍醐味」とありますが、筆者が「エスノグラフィ―研究」に魅力を感じているのはなぜですか。最もふ

さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 書かれたものと向き合うことで自身の複雑な感情を整理し、自分自身の成長に役立てることができると身をもって知っている筆者にとつて、自身が経験し考えたことを書き出す行為が持つ、見聞にまつわる思考が著述によって初めてまとまるという特徴と、その成立の過程で何が起きているのかを考えていく研究に興味を持っているから。

イ 感情に沿った言葉を書きなぐることによって自身の置かれた状況が整理でき、斬新な視点を獲得できると身をもって知っている筆者にとつて、自身が体験したことを書き残す行為が持つ、この世にまだ存在しないものを書くことによって顕現させるという特徴と、その表現されたものを題材にして考えていく研究に興味を持っているから。

ウ 書くという行為を通して感情に縛られてしまった状態を相対化し、整理することができると身をもって知っている筆者にとつて、自らが見聞きした現実を文書化する行為が持つ、書かれたものから考え、それが新たな見聞につながっていくという側面と、その文書化する過程に着目して考察していく研究に興味を持っているから。

エ 書かれたものと向き合うことで自分のつらい気持ちに区切りがつき、新たな気持ちで人生を歩むことができる身をもって知っている筆者にとつて、自らがどのように考えたのかを文章として残す行為が持つ、書くことで自身の考えと向き合い、次の行動に生かしていくという側面と、その一連の行為を研究という立場から整理していくことに興味を持っているから。

オ 文書化するという行為を通して自分自身を見つめ直し、感情的になつてしまった過去の自分と決別する上で必要なものだ身をもって知っている筆者にとつて、自らの見聞を書き表す行為が持つ、書かれたものから考える、考えたことをふまえて新たに見聞きするという相互作用と、両者が互いに影響を与える営みを研究として深めていくことに興味を持っているから。

問三——線(2)「自らがその世界へと』とりざらわれて『いく』とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちの世界とは異なる世界に身を投じ、日々の経験を書き留めていくことを通して、自身が世界を認識するための枠組みが他者を中心としたものに自然と変わっていくということ。

イ 私たちとは違う生活を営む人たちとともに暮らし、見聞きた出来事の細かな点を書き記していくことで、他者の世界のありようがだんだんと理解できるようになっていくということ。

ウ 私たちとは異なる社会制度の中で生きる人々の元へ行き、そこでの体験を書いて伝えていくことで、私たちが世界を認識する際に用いている方法を他者が獲得していくということ。

エ 私たちの世界とは地理的に遠く離れた人々と交流し、現地で感じたことを書き表していくことを通して、先入観が取り払われて他者を私たちと同じ人間として認識できるようになっていくということ。

オ 私たちにとって馴染みのない世界に飛び込み、現地の人々の視点から日々の営みを書き出していくことで、それまでの私たちの視点が強制的に破壊されて他者を軸としたものに変化していくということ。

問四 — 線(3)「自らの気づかれざる桎梏」とありますが、次の文章を読んで、「自らの気づかれざる桎梏」と同じ内容を述べていると考えられる部分を十六字以上二十字以内で抜き出して答えなさい。

現代文化人類学の祖とされるマリノフスキーが活躍した二十世紀初頭以来、文化人類学者であることの条件のひとつは、研究対象地で長期にわたってフィールドワークをおこなうことである。現地の言語を学び、現地の人々と寝食を共にしながら、参与観察によって、人々の考え方ややり方にゼロ接近する。その過程で、文化人類学者には、現地に入った初期の段階で感じていた違和、居心地の悪さみたいなものが、少しずつであるが溶解し、理解可能なものとなっていく。逆に、現地の人々のやり方や考え方から自分自身を遠ざけていたものが何であったのか、自分自身を呪縛していた文化的な背景とは何であったのかについて考えるようになる。

私自身が、プナンのフィールドワークの初期段階で抱えていた違和感のひとつは、「プナンは日々を生きているだけで、反省のようなことをしない」というものだった。私が町で買って持ち込んだバイクを彼らに貸すと、タイヤをパンクさせても、何も言わずにそのまま返してくる。バイクのタイヤに空気を入れるポンプを貸すと、木材を運搬するトレーラーに轢かれてペチャンコになったそれを、何も言わずに返却してくる。こうした様々な体験がその違和感には含まれる。

(奥野克己『ありがたうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』より)

問五 — 線(4)「書くという行為だけでなく、読むという行為にも通ずる営み」とありますが、それはどのような営みですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問六 — 線(5)「『アウェーの時間』」とありますが、次のアウエーは、本文で述べられている「アウェーの時間」についての生徒たちの感想です。「アウェーの時間」の理解として明らかな間違いを含むものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 親の仕事の都合で、小学校四年生までアメリカで過ごし、日本に帰国した後、英語の授業で先生に指名され、英語で発言する機会がありました。特に深く考えることもせず、いつものように話をしたのですが、クラスの人たちからは「とても発音がきれい!」「ネイティブみたい!」と驚かれ、その日から友達が一気に増え、一目置かれるようになりました。

イ テレビ番組を見ていたら、目隠しをされた芸能人が遠く離れた見知らぬ土地に連れていかれて、そこで生活をするという企画が放送されていた。何の準備もなく連行された芸能人にとっては、そこがどこで、どういう場所なのかも分からず、着のみのままの状態なので、これから様々な問題が起るであろうことは容易に想像できました。

ウ クラスの出し物について話し合っていて、候補として出た「浦島太郎」と「白雪姫」のどちらにするか、多数決で決めることになったのですが、私以外の全員が「白雪姫」に手を挙げ、私だけ「浦島太郎」に手を挙げました。その後、しばらくの間は「浦島太郎」を諦めきれず、孤独感を抱えたまま準備を進めることになりました。

エ サッカーが好きで国の代表戦もよく観ていますが、やはり敵地での戦いは大変だと思っています。会場が日本から遠ければ移動だけでも一苦労で、現地の気候、時差、食事や移動など、様々な問題を乗り越えてようやく試合となります。いざ試合となっても敵地の歓声の中でプレーしなければなりません。同じことは様々なスポーツで言えることだと思います。

オ 歴史上、色々な場所で開拓と移民が行われてきましたが、昔からその土地で暮らしてきた人たちにとっては、自分たちの土地が一方的に奪われ、自分たちの生活習慣や制度が破壊されることになります。仮に、開拓者に整備された土地で再び暮らすことができるようになったとしても、自分たちには馴染みのない生活習慣や制度が取り入れられた環境では苦しい生活になってしまうと思います。

問七——線(6)「方法としてのアウエー」とありますが、それはどういうものですか。最もいさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アウエーの人々と生活を共にすることで、ホームでは直面しないであろうハプニングに対応し、それを繰り返すことで研究の土台を固めていくというもの。

イ アウエーの側に身を置くことで、それまで自らが考えていなかった世界の問題点を思考対象として取り上げ、学問的見地から考察を重ねて深めていくというもの。

ウ アウエーの立場に視点を固定することで、私たちが抱えていた課題の別の側面を見だし、特定の観点から断片的なアプローチができるようにしていくというもの。

エ アウエーという表現そのものに注目することで、その言葉が持つ差別的イメージを言語化し、それらがなぜ形成されたのかという観点から研究を進めていくというもの。

オ アウエーで生きる人々を研究対象として取り上げること、辛い環境で過ごしている彼らの気持ちに寄り添い、心のケアに努めていくというもの。

問八——線(7)「エスノグラフィーを書き残すことは、ケアをめぐる議論とも交錯する実践となる」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。八十一字以上九十字以内で説明しなさい。

(問題は以上です)



令和七年度

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

受験番号				
				番
氏		名		

合計得点	※
------	---

↓ここにシールを貼ってください↓

--

—
問一
①
②
③
④

問二	
問三	
問四	
問五	
問六	

[illegible]

問八

二
問一
①
ね
②
③
④

問二	
問三	

問四

15

16

20

[illegible]

問六		
問七		

[illegible]

5

303

303

303

303

303

»